会派「きずな」による、ドイツ視察の目的について

「きずな」では、これまでの会派活動として、環境をひとつのキーワードとして取り組んできています。その中でも特に、再生可能エレルギーに関する課題に特化して視察や研修会を行ってきています。具体的には、木質チップやペレットの有効的利用法の研究や提言。家庭から排出される天ぷら油による軽油化の取組などが主なものです。

　今回、私たちが視察地としてドイツを選んだ理由は、環境政策においては世界的にも間違いなく先進地であるわけですが、特に、東日本大震災後、原子力発電所を2022年までには全廃するということを政権が発表したことで一気に再生可能エレルギー政策が脚光を浴びてきたことです。

　ドイツでは1990年代より自然エレルギーを活用した発電事業が活発化してきており、今回の視察予定地である「ユーンデ村」は、メタンガス発酵による発電、発熱事業で世界的に有名になりました。つまり、村民が株主となり会社を立ち上げ発電所を作り、売電事業を始めたのです。その際に発生する熱は、各家庭に配管されて給湯や暖房用として使われています。発電所で使用する燃料は、家畜の糞尿と生ごみや木の端材や枝葉などです。更に、菜種油による給油も行われていますが、政府の税制問題が絡んでいて課題が多い様です。

　ドイツ国内では、木質バイオマス発電所、風力発電所、太陽光発電所などを積極的に進めていますが、それぞれに一長一短がることは事実で、成功した事例や失敗した事例も数多くあります。その反省から、ドイツ国内各地の小規模な自治体に「新エレルギー村」を創っていきました。その数は今では、90カ所を超えるほどになり、もっとも進んだ成功例が、私たちがもう一つの視察予定地としているトロイエンブリーチェン村エレルギー発電所です。そこでは、木質、風力、太陽光などを組み合わせた複合エレルギー発電を行っています。

　今回の視察目的は、ドイツの環境政策を実際に我々の目で確認することにもあります。ですから、ベルリンでは専門家からドイツの環境政策について直接講義を受け、実際に自動車の排ガス規制では特に厳しいベルリンやハノーハーの環境ゾーンの視察、そして、各地のゴミステーションの運営方法などを勉強することとしています。ドイツでは1980年代に黒い森と呼ばれていた一帯が酸性雨により壊滅的打撃を受けました。そして、対応を議論する過程で、自動車の排ガス問題だけではなく、原子力発電所問題などもでてき、生活そのものの見直しが始まったと思います。国民性という言葉でドイツの環境政策を語る風潮がありますが、それは一種の逃げであると思います。

　視察後は、庄原市内各地で報告会を開催し、庄原市として取組めるところは取り組むべきと提言していこうと考えています。